

「博士論文」合否査定資料

申請者 文学研究科 日本語日本文化専攻 博士課程（後期）
職・氏名 飯塚 ひろみ

学位の名称 博士（日本語日本文化）

論文名 『源氏物語』歌ことばの時空
― 百敷・水鶏・女郎花から迫る ―

審査委員 主 査 吉海 直人

副 査 吉野 政治




副 査 本間 洋一

審査結果 合

2009.2.12 日本語日本文化専攻博士後期課程委員会 承認
2009.2.12 文学研究科博士後期課程委員会 承認

博士學位論文審査結果報告書

2009年 2月 13日

学 位 申 請 者	飯塚 ひろみ		
審 査 委 員	主 査	吉海 直人	
	副 査	吉野 政治	
	副 査	本間 洋一	

本学大学院後期課程在学中の飯塚ひろみから、『源氏物語』歌ことばの時空一百敷・水鶏・女郎花から迫る一」という論文を添えて、博士の学位論文の申請があった。これを受けて公正に審査委員が決められ、主査吉海、副査吉野・本間の三名が審査委員として審査にあたった。




各委員は申請論文を時間をかけて査読した後、2月2日に公開の口頭試問会を開き、申請者に対して内容の確認、ならびに学力検査を兼ねて申請者に対して試問を行った。約80分の試問であったが、各委員からは忌憚のない質問や意見が細部に亘って発せられた。それに対して申請者は、即座に一つ一つ丁寧に応答しており、好感の持てるものであった。この試問を通して、申請者の学力・人物ともに申し分ないことを確認した。

申請論文については、その独創的な方法は言うに及ばず、調査分析の精密さ・論理的な論の展開・豊富な新見を有しており、内容的に高く評価できるものであった。「歌ことば」による『源氏物語』研究の有効性は、十分納得されるものであった。今後の研究の進展も期待できるものである。

よって審査委員は全員一致で、申請者飯塚ひろみの申請論文に対して、博士（日本語日本文化）の学位を授与するに値するものであることを決定した。

博士學位論文内容要旨

2009年 2月 13日

学位申請者	飯塚 ひろみ		
審査委員	主査	吉海 直人	
	副査	吉野 政治	
	副査	本間 洋一	
<p>(要旨)</p> <p>本論文は、『源氏物語』という大きな作品に対して、重層的な背景を有する「歌ことば」に注目し、その特殊な使われ方を紡ぎ出すことで、『源氏物語』世界の一端を明らかにしようとしたものである。具体的に「百敷」「水鶏」「女郎花」という三つの異なる「歌ことば」を抽出し、その分析を通して検証したものである。</p> <p>従来の「歌ことば」研究は和歌文学が主流であり、「歌語」に限定されたものがほとんどであった。本論文では物語文学の研究に適応させるため、「歌ことば」の定義を地の文にまで拡大すると同時に、その語の内包する時空をも視野に入れることで、従来の研究から一步進展した独自の方法を切り開いていると思われる。</p> <p>具体的な論文の構成は、三部から成っている。まず序では「歌ことば」並びに「時空」というタームの定義に関して、これまでの研究史を踏まえて的確にまとめており、これを前提として本論が展開されている。特に非伝統的な新しい「歌ことば」の生成や、変容する「歌ことば」など、従来の固定化された見方を超越した「歌ことば」の世界が提起されている。</p> <p>もう一つの「時空」に関しても、従来の準拠論を踏まえた歴史的な「時空」のみならず、物語に流れる「時空」との複合により、『紫式部集』や『紫式部日記』との「歌ことば」の互換性をうまく説明している。この視点の導入も従来とは異なる方法と認められる。</p> <p>第Ⅰ部では宮中を意味する「百敷」をめぐって、その盛衰や枕詞的用法からの変遷、宮中賛美から懐旧への移行などが和歌史的にとらえられている。『万葉集』においては「大宮」に掛かる枕詞としてのみ機能していたものが、平安朝に至ると用例が激減するだけでなく、枕詞としての機能も消失してしまう。その中では伊勢が宮中賛美に用いて</p>			

おり、それが『源氏物語』において散文化しつつ、懐旧の念を込めた用法へ変容していることを明らかにしている。さらに同じく宮中を意味する「九重」（漢文の和訓）との交替現象のみならず、両者による過去と現在との使い分けが存することにまで及んでおり、「歌ことば」と「時空」の組み合わせがうまく融合して成果をあげている。「歌ことば」研究においても、漢詩・漢文を看過できないことが納得させられる。

第Ⅱ部は「水鶏」をめぐっての論考である。「百敷」とは対照的に非歌語であったので、従来「水鶏」についての研究は皆無であった。『拾遺集』に至って初めて歌語として登場した後、一条朝に至って用例が増加していることが指摘されている。特に女性の立場で詠まれることから、王朝女流文学に積極的に用いられているという指摘は興味深い。『源氏物語』においては、夏の代表であるほととぎすから「水鶏」への移行が生じていること、必然的に花散里との関わりが深いことが論じられている。

また「水鶏」の鳴き声の縁語として、「真木の戸」が詠まれているが、そこから特殊な「真木の戸口」が、『紫式部日記』において道長との贈答に用いられている。従来の二人の人間関係に立脚した論に、「歌ことば」から切り込んだ点が高く評価される。この「真木の戸口」は『源氏物語』からの引用の可能性さえ存する。

第Ⅲ部は「女郎花」の論であるが、花の名に「女」が含まれていることから、『古今集』以降は積極的に男性によって言語遊戯的な詠まれ方をしている。しかも従来は野の花だったものが、歌合の隆盛の中で野から掘り出されて前栽に植えられており、空間移動していることを発見している点は非常に興味深い。また『源氏物語』以前は、男性の視点から言語遊戯的に女性を揶揄する用法であったものが、『源氏物語』では女性詠みに変化し、さらにそれが夕霧の物語を通して玉鬘・落葉の宮・夕霧六の君という「女郎花の系譜」を形成していることを論じている点も新見である。三部の中ではこの「女郎花」論がもっともすぐれていると思われる。

以上のような「歌ことば」の分析から、紫式部と同時代の大斎院選子サロンや和泉式部、そして道長の和歌との関わりが浮き彫りにされ、『源氏物語』特有の表現が形成させている時代的な土壌が明らかになってきた。それこそが「歌ことばの時空」の狙いであろう。ここで分析された三つの「歌ことば」によって、物語の時空意識が明らかにされている。




本論文には「歌ことば」による新たな『源氏物語』論が確立されており、その堅実な手法による成果は、学界に貢献すること大である。また今後の研究の進展も十分期待で

きそうである。

以上から本論文の提出者飯塚ひろみには博士（日本語日本文化）の学位を授与する資格があると認められる。

博士学位論文審査結果要旨

2009年 2月 13日

学 位 申 請 者	飯塚 ひろみ	
審 査 委 員	主 査	吉海 直人 
	副 査	吉野 政治 
	副 査	本間 洋一 
論 文 題 名 『源氏物語』歌ことばの時空 —百敷・水鶏・女郎花から迫る—		
飯塚ひろみから提出された上記の学位請求論文（四百字詰原稿用紙約390枚）は、 三部から構成されている。その目次は以下のようになっている。 序 歌ことばと時空 Ⅰ 物語の黎明—〈時代〉を担う歌ことば— 第一章 百敷の文学史 平安期の位相—九重との対比から— 第二章 『源氏物語』における「百敷」の時空 Ⅱ 水鶏の鳴く夜—『源氏物語』における「百敷」の時空— 第一章 水鶏の文学史—平安期の和歌にみる「水鶏」— 第二章 『源氏物語』の「水鶏」をめぐって 第三章 「月入れたる真木の戸口」考 Ⅲ 女郎花の咲く朝—野辺の花から六条院へ— 第一章 女郎花の文学史—命名と移動— 第二章 夕霧の物語と女郎花 第三章 『源氏物語』女郎花の系譜—六条院の華として—		

まとめ

論文の概略を示すと、序で論題に用いている「歌ことば」と「時空」について、研究史を踏まえて解説し、本論文における定義を示している。その上でⅠでは「百敷」を、Ⅱでは「水鶏」を、Ⅲでは「女郎花」を取り上げ、それぞれ「歌ことばの時空」という観点から論を展開している。

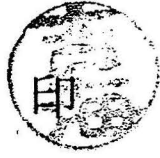


目次を見れば明らかなように、各部の前半では文学史（通史）的に用例や用法の変遷を詳細に調査・分析し、その成果を踏まえて後半で『源氏物語』の用例・用法を検討するというスタイルに徹している。Ⅱの第三章は、「水鶏」論の過程で浮上した重要表現ということで付け加えられたものである。Ⅲの第二、三章は、一つでは収まりきれない問題ということで、二つに分割して論じられている。総じて「歌ことば」には盛衰の変遷のみならず、用法の変遷も生じており、それだけでも独立した研究として十分評価される。

しかしながら本論文は、和歌文学研究に留まらず、それを『源氏物語』の研究に応用することで、『源氏物語』における用法の特殊性が明らかにされており、この方法の有効性も高く評価される。本論文で取り上げられた「歌ことば」はわずかに三つであり、やや物足りないものではあるが、その背後に膨大な「歌ことば」が存在することを思えば、今後の研究の進展も期待される。

以上のように本論文は方法論としても斬新で、内容的にもしっかりした構成になっている。しかも多くの新見が提示されており、高く評価される論文である。よって学位を授与するに値する論文であると認める。

試問結果の要旨

2009年 2月 13日

学 位 申 請 者	飯塚 ひろみ	
審 査 委 員	主 査	吉海 直人 
	副 査	吉野 政治 
	副 査	本間 洋一 
<p>(要 旨)</p> <p>提出された学位申請論文をあらかじめ下読みした上で、三名の審査委員が揃って、公開の口頭試問を行った。</p> <p>まず主査である吉海から、学位申請に至る全体的な経過を説明し、研究発表・活字論文の本数など、申請に必要な条件をすべてクリアーしていることを確認した。</p> <p>その上で、提出されたA4用紙百三十枚（四百字詰原稿用紙三百九十枚相当）の論文『源氏物語』歌ことばの時空一百敷・水鶏・女郎花から迫る一』について、厳正に試問を行った。</p> <p>最初に吉海主査は、論題になっている「歌ことば」及び「時空」の定義やその複雑さについて、論文ではどのように定義しているのか、またこの言葉をあえて用いた理由について質問したが、申請者から明確な使用意図が説明された。この方法が『源氏物語』の研究に有効であることを確認した。</p> <p>次にⅢ部構成になっている「百敷」「水鶏」「女郎花」の各部について、各委員から質問が行われた。本間副査からは誤植と思われる箇所の確認に続き、和歌の解釈の是非や「月入れたる真木の戸口」表現に関して、菅原輔正の漢詩表現との関わりなどについての貴重な意見が寄せられた。吉野副査からも、底本に関する確認に続き、「とばかり」という表現に関する掛詞の用法の是非についての質疑が行われた。その過程で「歌ことば」の有する言語遊戯的技法や縁語の重要性、背景としての漢詩の存在などが再確認された。また「歌ことば」の時代的変遷（時空）と『源氏物語』における表現の特殊性、紫式部の文学的素養の広さ、ひいては一条朝の文化サロンの質の高さも浮き彫りになった。今後はさらに大斎院選子サロンや和泉式部の和歌の重要性、『源氏物語』と『紫式部日記』・『紫式部集』との共通語について、研究を進めていってほしい。</p>		

本論で「歌ことば」として提起されているものはわずか三つであるが、それぞれに重要な問題を孕んだものが抽出されており、その背景に膨大かつ有効な「歌ことば」の世界が存していることが納得された。

口頭試問は約80分に亘って行われたが、各委員の質問に対する申請者の受け答えもしっかりしており、学力や人物についても問題ないことを確認した。むしろ論文は高く評価できるものであった。よって三名の委員の見解は、学位授与に十分値する論文であるということで一致した。